



Focus on #04, 小川理志さん Sea Side

Photo&Text : Kagii Yasuaki

ニューカレドニアの海について

鍵井(以下、鍵) 私がマサシさんに初めて会ったのは、確か2001年の春だったと思います。チョイ悪おやじの友人を介して、新宿のタイ料理屋でした。覚えますか？

マサシ(以下、マ) もちろん覚えています。チョイ悪おやじが「会わせたい」と絶賛する鍵井さんと会う前に、WEBでどんな人なのかを予習してから行きました。インドネシアで撮られた写真だったと思うのですが、赤や黄色、紫、一枚の写真にたくさんの色が封じ込められた絵を撮る人なんだな、って印象でした。実際会ってみると酒を飲むペースが1/5000秒の高速シャッター並に速い酒豪だった(笑)。

鍵 ヤバイ、マサシさんの人となり暴露していくつもりが、僕の暴露になる。初めてお会いして、ニューカレドニアの海のお話を聞いている時、正直、僕はあまりピンときていませんでした

(笑)。あ～、なんか遠い海だな～というくらいで。

マ そうだった！ 僕がニューカレドニアの海を一生懸命アピールしていたのに、反応の薄い鍵井さん。それから約一年後に突然撮影で来ることになったんですよね。

鍵 はい、月刊ダイバーの取材で2002年の4月9日～17日でした。この時は海洋状況も悪くて、あまり順調に進んだ取材ではなかった。正直、「この海にまた帰ってくるかな～」と疑問に思いました。

マ あの時はコンディションに恵まれなかった。冷や汗かきっぱなし！この場で詳細を明かすことはできませんが、余計なことを言って鍵井さんに変なフィルターを使わせてしまったり。今思い出しても落ち込みます……。

鍵 あっほんまや、そんなこともあった！あのフィルターにはほんまやられました(笑)現像上がり見て、当時の編集長に殺される～と思いました(笑)でもなんとか、生き長らえて翌年もニュー

カレドニア取材の依頼を頂いた。その時はバッチリでしたね(笑)

マ ほんと、翌年のリベンジがうまく行ってよかった。あのままで後悔を墓まで持ち込むところでした(笑)。それからの取材は毎回順調でお天気にも運にも恵まれ、カジノで引きの強いディーラーがブラックジャックを連続して出すかのように水中でもミラクルショット連発でしたね。鍵井さんのあの引きの強さはどこから来るんだろう？

鍵 いやいや、僕の引きじゃないです。取材班全員の運です(笑)でも、ホントに初年度は、もうニューカレドニアはないかも……と思いましたが、翌年からいい取材をさせてもらっている。世界中の海のなかで、一番印象が変わっていった海だって言い切れる。勉強にもなった。今は、「ニューカレで一番潜っている水中カメラマンだ！」と自負しています(笑)

マ 間違いない！でも潜ってないエリア、ポイントはまだまだありますよ。リフー島の洞窟、マレ島、グランドテール南の人口湖、ブーライユ、北部エリア、東海岸…ニューカレドニアは意外と奥が深い。これからもジャンジャン撮りに行きましょうよ！

鍵 リフー島の洞窟！行きたい！グランドテール南の人口湖？聞いてない！(笑)マサシさん、全て行きましょう！是非、知りたいです。ただマサシさんのコーディネイトだと、早朝から深夜まで、撮影が続くので大変なんですけどね(笑)



#04, 小川理志さん 「ALIZE」

Focus on Sea Side

マ また早朝から深夜まで行きますよ〜、撮らせまくりで！ 深夜は撮影でなく酒盛りですが。ホテルのミニBARのお酒を2人で飲みつくさないように、離島へはヌメアで酒の買出しをしてから行きましょう。

鍵 あれもヤバかったですよね。イルデパン島のメリディアンでしたっけ。お酒高かったけど全部飲んじゃった……(笑)。あの時は同室でしか、同じ天蓋付きベッドに寝たんですね。ふたりのベッドの距離がほんの少し。あっそう言えば、先日の取材の時も、マサシさんの腕が僕のベットまで届いていた。いや〜、あの状況だとやっぱり飲みます(笑)

マ メリディアン・イルデパンの部屋に入ってみると天蓋の下にベッドが2つピッタリくっついてたんですね。それを「これはまずいでしょー！」と言いながらベッドを離れた。でも天蓋があるからほんの少ししか離れない。豪華でロマンティックなバンガローシートだったので間違いが起きると大変です

から(?)。そうそう、この間も互いのベッドとの距離15cm。鍵井さんに指摘された翌日も寝返りを打った際、鍵井さんのベッドに僕の腕が伸びてました。これを読める皆さんに誤解されるといけないのでちゃんと言っておきますけど、僕はそっちの気はなくストレートですから！

鍵 わかってますよ〜、可憐な幼魚好きってことも(笑)。なんか、話がヤバくなってきたので、海のなかの話に行きましようか。これまでに月刊ダイバーの取材で何度も僕の言葉でニューカレドニアの海の魅力を紹介してきましたが、やはり短期間の取材では、その魅力の一部分しか知ることはできない。だからマサシさんの言葉でニューカレドニアの海を語って欲しいです。まず、ヌメアから。

マ はい。ニューカレドニアで最初に腰を落ち着けた場所が離島のイルデパン。ここのダイナミックでワイルドな海を毎日潜っていたせいか、本島のヌメア

なんてショボくってすぐに飽きちゃうんだろうな、というのが潜る前の予想。でも15年以上前から環境保護区に指定され守り続けられているヌメアのダイブスポットを潜ってみて、魚影の濃さにまず驚きました。ギンガメアジやバラクーダのトルネードはイルデパンでは見られなかった。なのにヌメアだといつも同じ場所で群れている。ウミガメなんて珍しくもなんともないくらい当たり前。野生のイルカと一緒に潜ったり、水面休息中、ボートのそばに突然ジュゴンが現れてスノーケリングを楽しんだり、よい意味で何度も期待を裏切られました。南半球のバリと称されるヌメアには、それなりにたくさんの方が住んでいる。そんな街に隣接した海でこれほど充実したダイビングを楽しめる場所は他にないかも。

鍵 確かに「テババ」というポイントは群れ好きのダイバーには堪らないですね。僕も撮影し易いから好きです(笑)。あと忘れてならないのがブラックマンタ

の存在ですよ。

マ そう！「テババ」は真剣に面白い！ワイド、マクロも面白い。去年の鍵井さんのロケ時にピックハンドルバラクーダの衝撃的シーンに出くわしたり。そしてヌメアで一番の目玉はブラックマンタです。4〜8月ならその遭遇率は90%を超す。マンタって、世界中色々なダイブスポットで出遭えるから個人的には興味の薄い生物に属していたんだけど、ブラックマンタは特別。ヌメアは普通の白いマンタよりブラックの方が多くてそこがまたよい。

鍵 いや「テババ」は僕にとっても思い出深いポイントです。あのピックハンドルバラクーダとの出会いはひとつの物語でした。長くて詳しくはお話できませんが、忘れられない出会いになりました。写真だけは掲載します。またモデルの文香さんはここで、バンドウイルカがバラクーダを食べる瞬間を目撃している。あ〜怖い……。

マ そう、イルカってカワイイというイメー

ジをみんな持ってますよね。でも「テババ」のイルカは狩る立場で現れ魚を追い回しています。文香さんが見たのはまさにその瞬間。怖いですよ。目にも止まらぬ速い泳ぎでバラクーダやギンガメアジに襲いかかります。そんなときにこっちがドルフィンキックで近くを泳いだりすると「えっ？」って感じで急に動きを止めることがあります。食欲よりも好奇心？それとも自分の真似をする変な生き物に気を抜かれてしまったのか？

鍵 マサシさん、そんなことしてるんですか？捕食中のイルカにドルフィンキックで接近……。結構笑えます。そして、ブラックマンタですよ。マサシさん潮を読んで、ばっちり当てますよね。

マ スミマセン。イルカ相手にそんなことやってます(笑)。取材中にマンタを当てるのって、実は毎回それなりに苦労してるんです。取材はなぜかいつもマンタシーズンでないときに行っていて、

その条件の悪い中でも潮のよいタイミングに潜れるように予め取材日程を組みますし、時間を合わせて入ります。そしてなるべく移動距離を少なくし、たくさんシャッターが切れるように撮影ポイントとなるおいしい部分のみを潜るように考える。当然と言えばそうなんですけど、潜れる回数が限られているからハラハラもの。カメラのストロボが光りだすとホッと胸をなでおろします。でも安心できるのはつかの間。今度はマンタを鍵井さんのもとへと追い込む作業が始まります(笑)。これが時としてキツイ!

鍵 すみません、いつもお世話になっています。でも、またお願いします(笑)そうそう以前、アリゼさんがダイビングを担当されたTV番組を日本で見ていて、俳優的場浩司さんがマンタと出会うシーンがあったのですが、画面の後方にもう一枚のマンタが微かに映っている!と思ったら、妻のまち子が「あれ? マサシさんじゃないの?」と言うんです。よく見れば、下半身がフル回転でフィンキックしているマサシさんだった。「すげ〜! カメラの前に追い込んで!」とまち子とふたりで、大爆笑をしたの憶えています(笑)

マ あのTVの時もキツかった(笑)。マンタに与えるストレスを最小限にするため大きく距離を取って全速力でマンタを追い越し、それからジワジワとカメラに向けて誘導していく。息が上がってレギ啜えたままゼイゼイ喘いで、酸欠で頭はガンガン(笑)。でもマンタの

下に入り仰向けになりながらシャッターを切りつつマンタをプチ抜いていく鍵井さんには敵いません!

鍵 前はフィンが良かったので、マンタをプチ抜けました。どこ行っても同じような撮影スタイル(?)だから、タイの取材の時も、ビッグブルーの大村健くんにも同じことを言われた(笑)干支が「イノシシ」なもので……猪突猛進なんです。ではなく……、ヌメアでは、マクロに生物もきっちり見せてくれるから嬉しいですね。

マ マンタやサメなどの大物だけでなく、もちろんマクロもじっくりネチネチと攻めます。ヌメアのマクロってけっこう面白いんですよ。エレガントゴビーやペインテッドアンティラスなどは珍しい部類の魚ですが簡単に見つかるし、イエローアイドレザージャケットなんていう鍵井さんのニューカレドニアライブラリーにない魚もまだいる。もう撮ってますか?

鍵井さんのマクロ撮影って撮るのがめちゃくちゃ速いですよね。F4使ってたときは特にそうだった。動きが一定でないベラの仲間でも追いかけてながら、しかも顔からカメラを離して腕を伸ばしたまま撮る。その姿に感動しました。

鍵 今、デジカメで水中撮影をしていますけど、まだ腕を伸ばしてしますよ(笑)イエローアイドレザージャケット……?

持ってないです。自分ではニューカレドニアの魚種はかなり撮影したつもりなんですけど、まだまだですね。やばい、ヌメアに魅力だけで、ボリュームがいつ

ぱい、いっぱいになりそうですね。最後にヌメアの海&ダイビングの魅力を、マサシさんの超個人的な嗜好でいいので教えてください。また、離島などは、WEB-LUEで取材してから紹介しましょう(笑)

マ はい、WEB-LUEの取材、どうぞよろしくをお願いします。

……その面積24,000km²と世界一広大なラグーンに面したヌメアでは、人を恐れない魚たちが我々人間を敵とみなさず優しく迎えてくれる。ダイバーを見ても魚が逃げないというこの事実は地味かもしれないけど特別なことです。これに加えて優雅で大きく貴重なブラックマンタの存在。

世界中、それぞれの海で固有の水の色がある。ヌメアの海は濃くなく薄すぎない透き通ったブルー。これは目で見るよりも写真で見るとその違いを認識しやすいかもしれない。このブルーのグラデーションに溶け込むように優しく包まれる幸福感はなにものにも変えがたい。そんなヌメアブルーの虜となり僕はここを離れることができません。

鍵ほんと、素敵なブルーがある。ミクロネシアや同じ南太平洋のタヒチとも違う。僕のイメージではヌメアは優しい青色です。あ〜また潜りたい!

ニューカレドニアで楽しむフレンチな休日

鍵 ニューカレドニアの取材でお世話になるようになってから、僕はフランス料理というものを初めて意識するようになりました。夜にヌメアのフレンチ・レストランに連れて行ってってくれるじゃないですか、正直、めちゃめちゃ美味しいですね。

マ うん、本当にウマイ! 僕も日本にいるときはフランス料理ノーマーク派でした。米が大好きだしナイフ・フォークって面倒だ、と思ってた。だからフレンチレストランや友達のフランス人宅に招



かれての食事はとても苦手でした。実際、出された料理を口に入れると、これがまじでおいしいんです! そしてヌメアのレストランは気づいたフレンチじゃなくデニムで入れる気さくな雰囲気。手造り風の店内デコレーション、工夫を凝らしているけどやり過ぎじゃないかわいい盛り付け、一番はお店の人の暖かい対応。フランス料理をおいしく食べることができる要素が揃っているんですよ。

鍵 「工夫を凝らしているけどやり過ぎじゃないかわいい盛り付け」か、僕の写真もそうでありたい…。ってな感じでまじちょっとした刺激なる。フレンチのお皿の中って、ひとつの世界観というか、作者の意匠がちゃんと見られる。身体には脂肪がついても、感性には脂肪が付かないという感じでしょうか。

マ一緒にラジオ出演したときもフレンチの話になって、鍵井さん、そんなことを言っていましたね。料理を見てそう感じるあたり、さすが写真家だ。僕の場合、身体に脂肪を付けずライフスタイルにたっぷり脂肪を付けたいです、貧乏な

Focus on Sea Side
#04, 小川理志さん
「ALIZE」

ので…。冗談はさておき、写真家や料理人のような芸術家じゃないけど感性は常に研ぎ澄ませておきたい。感性とは思惟の素材となる感覚的認識。これが鈍ると自然と向き合いながらのダイビング稼業を続けていけない。精神的豊かさのためにも持ち続けていきたいと思う。

鍵 ほんとにそうですね。マサシさんはやっぱりフランス的な感性に影響されていると思う。もう、そっちの文化に触れて長いでしょ。住む場所は人を確実に変える。マサシさんと飯食ってる時、一番関心するのは、バゲットの食べ方。お皿の上におかず、無造作にその脇に置く。そのパンを摘み食する動きがカッコ良い。所謂セクシーな感じ。マサシさんがシャンパンを注ぐ時もそう。これはただの日本人じゃないな～と思いました(笑)

マ えーッ、そんなことまで観察してたんですか？カメラマンの目って怖いなあ。自分では全然意識してませんが、ここに住んでいるうちに感化されたんですね。でも僕はバリバリの日本人ですよ。「仕事のための人生じゃない、人生のための仕事だ」というフランス人の考え方は好きだけど、正直ついていけないところが多々ある。自分が日本人でよかったと思っています。

鍵 先日の取材で、フランス人男性の身のこなし方？ 飯の食い方？ のことで、なんか誉めてましたよね。

マ どんないいことを誉めてたんだろう？忘れてしまいました。食事に時間をかけるところ、会話を楽しむところ、女性に

対する優雅な振る舞いは見習いたいですね。

鍵 そういう部分を思うと、マサシさんはもう半分、フランス人だと思います。はい。取材で毎回、ヌメアの美味しいフレンチレストランに連れて行ってくれますが、マサシさんがデートで行く？ いやお勧めのお店はどこですか？

マ え～、やだなあ～。100%日本人でいたい(笑)。こんな島にいても毎日忙しくてデートどころじゃないですが、おすすめはココティエ広場のそばにある「ZANZIBAR(ザンジバー)」、それから「La Chaumie(ショミエール)」。どちらもおいしくてかわいいお店です。ちょっと臭いの強めな臓物煮込み料理なんかもある「La Chaumie」は鍵井さんにとって思い出深いお店じゃないですか(笑)？

鍵 ふたつとも知ってる！「ZANZIBAR(ザンジバー)」は美味かった！初めてウサギも食べた。かなり高得点のお店。一緒に行ったモデルの文香さんもおいしいものを食べているからか、より一層かわいく見えた(笑)そして、ついこの前食べた「La Chaumie(ショミエール)」の子羊の腎臓煮込み。お店の人の「香りがキツイから止めなさい」というアドバイスを無視してオーダー。あれは、もう懲り懲りです。今考えても胸焼けがする。あの料理がメニューに存在するのだから、僕はとても関心したんです、「フランス人は凄い!!」と。

マ 日本にも納豆やクサヤに代表される香りの強い食べ物がありますがフレンチもすごい。フランスではメインディッ

シュの後にチーズを食べる習慣があります。ヌメアのスーパーへ行くとその種類を数え切れなくらい色々なチーズを量り売りしていますが、シェイブル(山羊のチーズ)の臭いは未だに馴染めない。食べた瞬間、口の中いっぱい獣の香りが広がる…と同時に子供の頃、親に連れて行ってもらって見た動物園のゾウの臭いを思い出します。

鍵 うあ、未知なるものに、かなり興味がありますけど……、獣の香りはもう勘弁です(笑)。半分フランス人になっているマサシさん、いきなりですが、最後にダイビング&美食の旅をまとめて！お願いします！

マ だから100%日本人だって！(笑)まとめということですが、どうまとめているのか……。とにかくニューカレドニアというデスティネーションはダイビング以外にも付加価値が高い。そのひとつ、例えば南の島でフランス文化に触れることができる。フランス文化といってもヨーロッパのそれとは違い、やはり南の島らしい雰囲気と香りを含んでいる。そんなところでダイビングに興じ、世界で一番美しいと名高いビーチで時の流れを忘れて過ごす。食文化も充実しているので、おしゃれなフレンチやベトナム料理にイタリア料理、ちょっと変わったところではモロッコ料理なんかも楽しめる。そして街歩きで偶然見つかるすてきなお店。どれも旅そのものを思い出深く印象付けてくれる演出となる。

……地元の人たちはニューカレドニアの

ことを「Caillou(カイユ)」と呼ぶ。石ころという意味ですが、宝石をこのように言い表すこともある。南半球の小さな石ころのような島だが宝石のように美しく価値のある場所だと、ここで暮らす誰もが誇りに思っている。観光産業にはそれほど力を入れておらず、施設も人もまだまだ素朴さが残るが、その分手厚く自然が保護され、ジュラシックな森と呼ばれるリビエルブルー州立公園といった緑と赤い大地による色彩と造形美がそのままの形で残されている。



Photo by Masashi Ogawa

海に目を投げれば、そこはコーラルシーの固有種であふれ、各島、エリアごとにその趣が変わり、生物や地形、サンゴの種類までもその地の特性を主張しているかのよう。神様がそのチャンスを与えてくれた一生に一度しか出会えない本当の恋人のように、会う度に、時を重ねるごとにその魅力を知ることになる。海に対して思い描いていた夢がここで現実へと変わる。TVや雑誌、ガイドブックでは明かすきれない未知な領域の数々。この地を踏んで海に溶け込み、暮らすように過ごすことによってその良さを感じてもらいたいと思います。

鍵 やはり考えていることがロマンチックやな～、どっかフランスっぽいな～(笑)。でもほんま、そのような魅力の溢れている島ですよ。今日はありがとうございました。長々と～

マ 無理やり僕をフランス人にしようとしてるでしょ～。ロマンチックだなんて勘弁して下さいよ(笑)。こんなに長くニューカレドニアについて語ったのは初めてですが、とても楽しかったです。ありがとうございました。次回のロケも楽しみにしています！

Focus on Sea Side
#04, 小川理志さん
[ALIZE]